

人間の本性に関する考察

An Essay Concerning Human Nature

澤 佳成（東京家政大学非常勤講師）

Yoshinari SAWA (A part-time Lecturer of Tokyo Kasei University)

要 旨

本稿の主題は、人間本性の範囲を考察することである。

そのためにまず、自己保存欲求にもとづく人間本性を展開した哲学者、ルソー、ホッブスの思想を考察した。次に、ルソー、マルクスとS・ミズンの議論をもとに、自己保存の欲求と意識および社会性との関係について考察した。そしてそれが、言語と芸術をあつかう人間の能力と深く関わっている点を考察した。

以上の考察から、自己保存の欲求と私たちの生物学的要素を第1の人間本性の基体とし、社会・文化を第2の人間本性の基体とすることを提唱した。そのうえで、人間本性とは、それらふたつの基体を交差させる人間の属性、すなわち、「生産性」「社会性」「意識」「普遍性」であると結論づけた。

The theme of my theses is concerning an area of human being.

For that purpose, first, I considered the thought of Rousseau, Marx, which discussed the human nature based on our desire of self-preservation.

Next, I considered the link among our desire of self-preservation, our sociality, and our consciousness based on the thought of Rousseau, Marx, and Mithen. This point, deeply connect our ability of language and Art, I considered.

All these consideration, I presented the viewpoint calling our desire of self-preservation and our biological element “first basis of human nature”, and our society and culture second that. Furthermore, I came to reach a conclusion that our human nature is our property, that is, our “productivity”, “sociality”, “consciousness” and “universality” on the cross between first and second basis of human nature.

キーワード：「人間本性」「自己保存の欲求」「意識」「社会性」「人間化」

Keywords : Human Nature Desire of Self-Preservation Sociality Consciousness Humanization

第1節 はじめに

人間の本性（Human Nature）とはいったい何だろう。この点についての探究は、哲学の歴史において重要な側面を担ってきたように思われる。その定義は思想家によって多様であるけれども、内容を概観してみると、次のふたつに大別できるように思われる。

第1に、人間が生まれながらに持っている特質や属性を人間の本性とする見解である。とくに、人間の自己保存の欲求にたいするまなざしは、多くの思想家の議論のなかに、共通の要素として見られるように思われる。第2に、人間が人間であるための、もしくは、生物学的なヒトが社会的な存在としての人間となるための条件となる特質を、人間の本性とする見解である。これらの視点は、どのような形で、人間本性を主張する議論のなかに見出されるのであろうか。

まず、人間本性にかんする議論のうちに、両視点が相対的に内包される形となって現れる。たとえばJ・J・ルソー（Jean Jacques Rousseau）は、人間の自己保存の欲求と「憐憫の情」とのふたつを人間本性としたのであるが、動物にも見られる自然的な感情だとされる憐憫の情は、ヒトが人間となるにあたっての重要な要素として描かれている点で、第2の視点も内包するといえるだろう¹⁾。

次に、一方の視点の内部でも、その見解をめぐってときに鋭く対立する。たとえば、先の本性にかんする第1の視点に照らして考えてみるならば、T・ホッブス（Thomas Hobbes）は、かの有名な「万人の万人にたいする闘争」という自然状態における人間の闘争状態を、人間が生来もっている3つの人間本性、すなわち「競争」、「不信」および「誇り」とが引き起こすものと考えた²⁾のにたいし、ルソーはホッブスの見解を鋭く批判し、人間の生来もっている本性は、先のふたつの特性にこそ求めうるものだと指摘したのである。

また、ときには、両視点それぞれに立脚した主張相互が、他方と対立するという形をとって現れる。第1の見解の究極にある議論は、人間の遺伝的特質が各人の性格を形作するという議論であろう。それにたいして、第2の議論の究極にあるのは、人間はこの世に生を受けた後の経験によってこそ、各人の性格は形作られるという議論であろう。この合理主義と経験主義とのあいだの論争からはじまった「生まれか育ちか（Nature vs Nurture）」という双方の主張が、前者は主に自然科学によって擁護され、後者は人文・社会科学によって擁護されることで、激しい論争を巻き起こしてきたのは、周知の通りである³⁾。その間、哲学上の人間本性にかんする探究は、人間の脳や心にかんする自然科

学的な解明の飛躍的進歩により、重大な岐路にたたされてきたといっても過言ではない。

現在では、人間の遺伝的形質と社会的な経験双方をともに重視する主張が議論の主軸となりつつある。その一方で、遺伝的に罪を犯しやすい性格の持ち主は社会的に隔離すべきだといった主張が正当な議論として新聞紙上に躍ったりする。遺伝子決定論の分かりやすさは色あせる気配をみせるどころか、社会的な不安や競争的な風潮とあいまって、その存在感を強めてきているように思われてならない。

しかし、このような議論は、次のような素朴な疑問にたいして、有効な方向性を示しえない。それはすなわち私たちが人間としての遺伝的なあらゆる要素を身体の中に継承していたとしても、それが発現するには社会的な人間的成長のプロセスによらなければ困難なのではないか、という疑問である。私は、この疑問にみられる、遺伝的な部分と経験的な部分の双方を重要だとする議論を、これまでの哲学的な人間本性にかんする議論と照らし合わせる作業を通して、積極的に肯定できるのではないかと考える。本稿の主題は、この作業から、思想的な人間本性にかんするこれまでの探究を、意義あるものとしてどこまで位置づけることが可能であるかを吟味し、人間本性とは何か、その範囲はどのように設定されるのかを考察することにある。

はじめに、本稿における鍵概念として、マルクスの人間本性論を探究したブタペスト学派のG・マルクシュ（Gyorgy Markus）による、人間本性の4つの枠組みを提示しておきたい。それは、「生産」「社会性（共同性）」「意識」「普遍性」である⁴⁾。これらの概念の意義をふまえつつ、以下のように考察をすすめてゆきたい。

まず、第2節において、人間本性が議論される際におおきの思想家によって前提とされてきた人間の自己保存欲求について、人間の社会性や意識と関連づけて考察したい。

次に、第3節では、前節の視点をふまえ、人間本性を考察するうえで重要だと思われる言語と芸術の二要素について考察し、それらが人類の諸活動の普遍性へと連なる橋渡しになったのではないかという観点をもとに考察してみたい。さらに、第4節では、以上の点をふまえつつ、「文化の二重継承理論」と関連づける形で、人間本性について考えてみたい。

その上で、第5節では、以上の考察を歴史的事実から検証することによって、本稿での諸前提が正当性をもちうるかどうかを検証してみたい。最後に、以上の考察から浮かび上がってくる、人間本性にかんする本

稿での視点を提示してみたい。

第2節 自己保存の欲求と人間本性

第1項 自己保存欲求を人間本性の前提とする哲学的議論

本項ではまず、人間における自己保存の欲求を人間本性の前提としてきた思想家の議論を中心に考察し、そこで前提される視点を探ってゆきたい。

自己保存の欲求という観点から、対極ともいいうる人間像を描き出しているのが、周知のとおり、ホッブスとルソーである。「自然は人びとを、心身の諸能力において平等につくった」⁵⁾と考えたホッブスは、この能力の平等こそが、自然状態における人びとの闘争状態を生み出すのだとする。なぜならば、能力が平等であるということは目的を達成するための希望も平等になるということを意味し、あるふたりの人が同じ目的を欲するとするならば、互いに競合して目的が達せられない場合、彼らは敵対することになるからである。そしてこのときの目的こそが、「主としてかれら自身の保存 conservation であり、ときにはかれらの歡樂 delectation だけである」⁶⁾とホッブスはいうのである。

この議論にたいしルソーは、次のように主張する。自然状態においては、善や悪という観念やそれにもとづく社会的関係は存在しなかったのであるから、道徳的な関係も存在しなかったはずである。だから、ホッブスは、「自然状態とはわれわれの自己保存のための配慮が他人の保存にとってもっとも害の少ない状態なのだから、この状態は従ってもっとも平和に適し、人類にもっともふさわしいものであった、と言うべきであったのだ」⁷⁾。その上でルソーは、自然状態における人々は各々が孤立した状態で自己保存の欲求を満たしており、また、かれらは自然的な「憐れみの情」⁸⁾をもちあわせていると考えた。

もちろんホッブスも、自然状態の人々を闘争状態のまま放っておいてもよいと考えた訳ではない。そこでホッブスは、人間には理性とそれにもとづく熟慮がそなわっているとし、熟慮のもとに発見された法則、すなわち自然法（Law of Nature）の重要性を指摘する。人々が自然権⁹⁾のもとに生存のための闘争を続けるかぎり、自己保存欲求の満たされる可能性はかえって低くなる。そのため基本的な自然法の必要性が高まってゆく。「各人は、平和を獲得する希望があるかぎり、それにむかって努力すべきであり、そして、かれがそれを獲得できないときには、かれは戦争のあらゆる援助と利点を、もともとめかつ利用していい」¹⁰⁾というの

がそれである。そのために人々は、相互の信約のもと、各々が平等に自らの自然権を共通の権力にあずけ、お互いを侵害しないかぎりにおいて自由を行使できるというあの社会契約へいたると、ホッブスは考えたのである。

よく指摘されるとおり、ホッブスとルソーの描いた自然状態は思考実験であり、その点において歴史的事実からは程遠いかもしれない。しかし、ホッブスの熟慮による自然法、ルソーの憐れみの情による他者への配慮¹¹⁾ いずれをとっても、私たち人間の意識という視点が不可欠なものとして内包されているという点に注目したい。なぜならば、ふたりの思想のなかでは、自己保存の欲求を基盤とした人間の意識が、自らの社会性をも契機づけるように思われるからである。その意味で、ホッブス、ルソー双方の議論において、自己保存の欲求が、人間本性の要素とされていることは強調されない。ほかの思想家にも共通して見られるこの点を、人間存在における社会性の基礎とみることはできないだろうか¹²⁾。

さらに敷衍してみたい。自己保存欲求の基礎たる身体的・自然的欲求は、他者と協力し自然にはたらきかける諸活動において満たされうる性質のものである。この視点は、ホッブスにおいてはお互いの生存のために努力を要請する自然法において、ルソーにおいては、憐れみの情による他者への配慮から段階的に共同体が拡大するという考え方において、表現されている。ここにみられる社会性は、他者への意識を必然的に内包しているといえよう。この他者への意識は、人間の本性を考える上で重要な視点となるように思われる。

そこで次に、この点を念頭に、「意識」および「社会性」について、さらに深く考えてみたい。

第2項 意識

1) 自己保存の欲求による他者へのまなざし

自己保存欲求を満たすための自然的・身体的欲求は、他者と協働し自然にはたらきかける点において、人類の祖先であるヒトが人間化 (Humanization) するなかで生じた意識とも連関するように思われる。まずこの点を、ルソーとK・マルクス (Karl Marx) の思想をひもときながらみてゆきたい。

手始めとして、少し長くなるけれども、ルソーのこ

とばを引用してみたい。
「どんな動物も、感覚をもっているのだから、観念をもっている。動物はある程度までその観念を組み合わせさえする。そして人間はこの点では禽獣と量の上で違いがあるにすぎない。～中略～それゆえ、動物の間で特別に人間を区別するものは知性ではなくてむしろ

彼の自由な能因という特質である。自然は全ての動物に命令し、禽獣は従う。人間も同じ印象を経験する。しかし彼は自分が承諾するも抵抗するも自由であることを認める」¹³⁾

このルソーの主張は、動物ならば身体的欲求を満たすため本能によって即物的に自然にかかわるが、人間は自己の欲求から自由にあずかるまい、また自然にたいしても自らの観念によって自由にかかわる即自的かつ対自的な存在だと換言できるだろう。そして、この点は、ルソーにおおきな影響を受けたマルクスの思想にもみることができる。

マルクスはいう。「なるほど、動物もまた生産する。～中略～しかし動物は、ただ自分またはその仔のために直接必要とするものだけしか生産しない。すなわち、動物は一面的に生産する。ところが人間は普遍的に生産する。動物はたんに直接的な肉体的欲求に支配されて生産するだけであるが、他方、人間そのものは肉体的欲求から自由に生産し、しかも肉体的欲求からの自由のなかではじめて真に生産する」¹⁴⁾。

ところが、それだけではない。「動物の生産物は直接その物質的身体に属するが、人間は自分の生産物にたいし自由に立ち向かう」ことができる。なぜならば、「人間はそれぞれの種属の基準にしたがって生産することを知っており、そしてどの場合にも、対象にその〔対象〕固有の基準をあてがうことを知っている」からである¹⁵⁾。

このようにして、人類は、自然の属性や法則にしたがって道具をつくり、気候や地形に合わせた技術を発達させ、それらをもとに協働して自然にはたらきかけ、自己の保存欲求を満たしていく。このプロセスにおいて、人類は、文化的・社会的側面を発達させていく。この際、マルクスが前提しているのは、ルソーにもみられるような、他者を自己と同様の欲求をもつ存在であると理解する意識の存在なのではないだろうか。

マルクシュはマルクスの意識に言及し、「意識は一方では現実の『精神的再生産』として、環境世界の——そこにいる人間による、活動する物質的な主体自身による——認識として現れ～中略～意識は他方では、活動を介して達成されるべきもろもろの目標・理想・理念・価値の『精神的生産』として現れる」¹⁶⁾と述べている¹⁷⁾。

以上の点から、自己保存の欲求を基底としてもつ他者へのまなざしとしての意識とそれにもとづく社会性という観点は、ヒトが人間化するプロセスにおいて、相互に深く連関しているように思われる。

2) 社会的知能と自己保存の欲求

一方、人間の祖先は元来集団で生活していたのであ

り、その社会的関係のなかで、どのように自己保存の欲求をみたすかを第一に思考して行動していたのではないかという見地から興味深い提唱をしているのが、認知考古学者のS・ミズン（Steven Mithen）である。

ミズンによると、人類の先史時代はおよそ600万年前からはじまるにもかかわらず、さまざまな文化的遺物が多様性を見せるようになるのは、約5万年前からにすぎない。ミズンは、わたしたち人類の祖先の心のメカニズムにこそ、この長い先史時代をくぐらなければならなかった要因があるとし、考古学的史料を霊長類学的・心理学的な視点からひもといていくことによって、人類の心の進化を解き明かすべく次のような仮説を提唱する。

ミズンは、人類の祖先の心のなかでまず、あらゆる知覚をとらえることのできる一般知能が発達したのではないかという。これは、「モジュール」すなわち「それぞれが特定の型の行動を担当する『認知領域』あるいは『いろいろな知能』¹⁸⁾を、日常的な活動においてあらゆる組み合わせから試行錯誤する知能である。心の領域を聖堂にたとえるならば、この一般知能は基礎的な部分にあたり、次第に専門的な知能の領域が、その聖堂の上部構造として形成されていく。その最初のもので、「他の個体に関する、誰が誰と友達か」という広範な社会的知識の所有と、それらの個体の心の状態を推測する能力」である「社会的知能」¹⁹⁾ではないかとミズンはいう。それは、チンパンジーの世界を観察することによって理解できる。彼らには社会的な関係に関する知能の発達はみられても、道具を対象にあわせて複雑化させたり、食料の在処を博物的に心にとどめたりするような知能の発達はほとんどみられず、互いの知能のあいだに壁があるようにみうけられる。そこから、人類の心においては、社会的知能がより複雑になると同時に一般知能も複雑さを増したと考えられ、「植物収集活動に関係し、心が資源の分布についての大規模なデータベースを構築できるようにする心のモジュールが初めて姿をみせた」のだとミズンは指摘する²⁰⁾。

このようにして「技術的知能」「博物的知能」が聖堂の上部構造として発達し、それとともに「言語的知能」も発達するが、それぞれの認知活動はまだ独立していたため、それらが統合的に認知に活用され柔軟になっていく「一般化型の知能」を獲得するプロセスもまた、長い時間を必要とした。そのため、人類の先史時代はきわめて長い時間を要したのだとミズンは結論するのである。この点は、動物の解体・道具の作成・調理といった活動の場所が、古い遺跡ではそれぞれ離れて見つかる傾向があるけれども、新しい遺跡ほどそ

れらが一体となって発見される傾向にあるという考古学的知見からも、裏付けられるという²¹⁾。

本項での考察に関連して興味深い点は、社会的知能が人類の先史のきわめて早い段階のうちにみられたのではないかというミズンの指摘である。ミズンの見解では、他者における集団内での社会的な地位や友人関係を把握するということは、食物の分配や集団内での抗争時に、自らの生存欲求の充足を有利にするために必要な条件となるという。

ミズンの仮説がもしも真理であるとするならば、人類の祖先は自己保存の欲求をまもるために、利己的な視野から社会性を身につけたことになる。一方、ルソーやマルクスの見解が真理であるとするならば、私たちの祖先は、他者を、自己の保存欲求と同様の欲求をもつ存在としてみることで、他者愛的な視点から社会性を獲得していったことになる。どちらが真理であるかは、数少ない当時の情報から仮説を組み立てて議論するしかないだろう。しかし、どちらが真理であったとしても、次の点だけは共通しているように思われる。すなわち、自己保存のための身体的欲求こそが、他者を自らと同じ欲求をもつ存在として意識することを可能にし、また、人類が社会性を帯びるための基盤となっている、と。

以上の点をふまえると本項の1)で提唱した、人間化における意識と社会性との関連性が人間存在の特殊な点であり、しかもそれらが前項から考察してきたように自己保存の欲求を基盤としてもつならば、人間存在の「意識」と「社会性」とは、人間本性の一要素だといえるかもしれない。

第3節 人間本性と言語・芸術

第1項 言語

それでは、社会性を維持するために、私たち人類の祖先はどのような方法をとったのだろうか。それを毛づくろいのなかにみたのがR・ダンバー（Robin Dunbar）である。ダンバーは、類人猿の集団規模と脳の容積の割合とを比較し、個体数の多い集団ほど脳の容積が大きいことから、集団が大きいほど、社会的な知識の多様性が増し、それを処理するための能力が必要となって脳の容積が増大したのではないかと分析する。また、このプロセスにおいて、社会性を維持するために、言語は生じたのではないかと指摘する²²⁾。ミズンはこのダンバーの議論を援用し、「この議論の重要な特徴は、最初期の言語の主題が社会的相互作用だったということ」であり、「それは実質的に『社会的言語』だったのだ」とする。そのうえで、「集

団の規模／社会的知能の増大と言語能力の上昇には、このような相互的進化が起こった」²³⁾とする²⁴⁾。

ミズンの考え方にかんしていえば、ルソーの言語観も親和性があって興味深い。ルソーは、人間の最初の言語を、危機を知らせるための、あるいは苦痛を軽減するための「自然の叫び声」であると考えた。しかし、「人々の観念が拡がり、増加しはじめ、人々のあいだにさらに密接な交通が開けたとき、彼らはもっと多くの記号と、もっと範囲の広い言語とを求め」、さらに「彼らは音声の抑揚を増し、それに身振りを加えた」という²⁵⁾。この点を敷衍するならば、ルソーの考え方は人々の交流こそが言語の複雑さを増大させたという意味で、ミズンの主張と重なりあう。

ともあれ、言語の起原が、これらの主張のように社会的な交流によるのか、それとも諸対象にたいする意味づけを社会的な合意によって行う過程で必要になったことによるのかは、諸分野の研究動向を参照しつつ、慎重に判断しなければならないだろう。しかし、言語の発達、物質的なもの以外の対象にまで名辞を与えるという意味で、社会的知能はもちろん、人類祖先の「博物的知能」（「動物についての思考、植物についての思考、そして水源や洞窟の分布といった居住域についての地理学である」²⁶⁾ 知能）やそれらにもとづく「技術的知能」の発達にも影響したのは、間違いないのではないだろうか。そうして、ホッブスがいうように、「それ（ことば：著者注）によって人びとは、自分たちの諸思考を記録し、それらがすぎさったときには、それらを想起し、さらにまた、相互の効用と交際のために、それらをたがいに公表する」²⁷⁾ ことが可能になったのではないだろうか。

第2項 芸術

こういった視点からミズンの芸術にかんする論考をひもといてみると、マルクスの思想との連関をそこに見ることができ、大変興味深い。

ミズンは、「芸術の製作を左右する重要な三つの認知過程——心の中で図像を構想すること、意図的な伝達、意味の付与——はすべて初期人類の心の中にそろっていた」と主張する。そして、それは、「技術的知能」「博物的知能」「社会的知能」それぞれの間の縦割りの認知の壁がとれ、対象を統合的に認知することが可能になって初めて説明できるのであり、だからこそ、約4万年前に初めて芸術作品が作られて以降、ヨーロッパにおける文化の爆発的開花が起こったのではないかと仮説を展開している²⁸⁾。

ところでマルクスは、人間が普遍的に生産するという点の主張（本稿2節2項の1）に際し、続きとして、

「だから人間は、美の諸法則にしたがってもまた形づくるのである」²⁹⁾と述べている。これを敷衍してみると、対象の属性や法則を知り生産に役立てる人間は、それを自己の外に表出する（対象化する）ことによって、つまり自己のうちにある対象の属性や法則を表出することによって、芸術をかたちづくるという人間の営為の特徴を、マルクスは「美の諸法則」と表現したのではないかと考えることもできる。

この点を念頭に、ミズンの「……芸術作品の多くがまったく新しい種類の道具」、つまり「情報を蓄積するための道具、心の中に蓄積された情報を取り出すための手引となる道具」³⁰⁾であるという主張にふれたとき、私たちは、そこに、マルクスの考え方と、ミズンの考え方との親和性がみることができる。また、人間は、そのような生産行為を時間的にも空間的にも普遍的に行う存在であるというマルクスの前提を考慮するならば、ミズンのいう芸術の重要な三要素、すなわち、「前もって心の中に描いておいた形状の模様やものを意図的に作る能力」にもとづいた、他の人々・将来の世代への「意図的な伝達」、具体的対象ではない、自らの創り出した「無生物の物体や模様の意味を付与すること」³¹⁾は、人間の普遍的・歴史的な営みをもまた意味するということができる。時間、空間を超越した世代にたいする、自分たちの知の意図的な伝承という、人間の芸術的要素のうちに私たちがみることのできるのは、人間の他者へのまなざしという、あの「意識」と「社会性」との基盤となる視点である。

この点は、時間的・空間的意味での、そして、私たち人間の知の「普遍性」が、人間の「意識」と「社会性」を支えるための、人間の本性の一要素として意味をもちうる可能性を示唆しているように思われる。

第4節 人間本性と普遍性

「普遍性」の考察に入る前にまず指摘しておきたいことがある。それは、「意識」と「社会性」が人間本性の一要素であるといえるならば、その基盤として存在する人間の生産性、すなわち、各知能をもちいることによって、自然の諸法則や属性にはたらきかけを行う生産活動もまた、人間本性の一要素といえるのではないかとすることである。そして、その前提である自己保存の欲求は、これら人間本性の各要素における基盤であるといえないだろうか。ホッブス、ルソーやマルクスがいうように、動物も同様の欲求を持っているとするならば、これを人間の本性に組み入れることは困難であろう。しかし、この欲求を、人間本性の基盤のひとつとみなすことは意味のあることではないだ

ろうか。そこで、私は、この人間本性の基盤になる要素を〈人間本性の基体 (Bases of Human Nature)〉と呼びたい。

このように考えてみると、人間の自己保存欲求にもとづく身体的欲求は、社会的・文化的な要素を多分に含んだ人間の諸活動によって満たされる点で特殊である。しかも、この点で、自然的欲求は社会的欲求に溶かし込まれているといえる。

たとえば、寒さをしのぐために暖かい環境が欲しいという欲求を満たそうとすると、人間の場合は、衣服や住居という文化的なモノを共同（働）的に生産する必要がでてくる。食欲にしても、人類の歴史とともに、ただお腹を満たすためではなく、よりおいしく調理したり、道具を工夫してみたり、完成した料理の美しさを追及したりするという文化的な要素が含まれてくる。さらには、かの他者へのまなざしによって、身体的な欲求の満たされていない他者の存在する場合に、そのような事態を回避し援助しようとする規範的価値もまた、生み出されるかもしれない。

このように、人間存在は、単に遺伝的な欲求にもとづいてのみ生命を維持するわけではない。自然的な欲求を満たすという目的のために、ミズンが提唱したような遺伝的知能を用い、言語的コミュニケーションを発達させることによって意識的・社会的な活動を進展させ、自らの生存を維持する存在である。このことは、諸個人における遺伝的能力と文化や社会との相互作用によってこそヒトは人間となりうる、ということになるのではないだろうか。

この点の考察で参考になるのが、M・トマセロ (Michael Tomasello) の議論である。トマセロによると、人類は霊長類にも見られるような「先祖から生物学的な面と文化的な面の両方において継承した特性に基づいている」「二重継承理論」のあてはまる種であるけれども、決定的な違いは「ヒトがより深いレベルで、同種の者を自らと『同一視』するという事実である」³²⁾。そして、この認知上の違いが人類に次のことを可能にしたという。

第1に「社会的生成 (sociogenesis) のプロセスを通じて、多くの個体が共同で歴史の蓄積をもった文化的な所産や実践を創出すること」である。そして第2に「文化学習と内在化のプロセスを通じて、同種の者が共同で創り出した所産のさまざまな側面を発達中の個体が学習し、やがて自分のものとする」とである³³⁾。

人間の赤ちゃんは、生後9ヶ月くらいを境として、「他者が自分と同じように意図を持つ主体であり、その主体と外界の事物との関係に自分自身と外界の事物

との関係を同調させたり、逆に自分自身と外界の事物との関係に他者と外界の事物の関係を同調させたり、事物との関係を他者と自分で共有したりする」「共同注意」の行動ができるようになっていく³⁴⁾。このヒトに固有のスキルと、「自分の感覚運動的動作を意図的に組織する」という生物学的遺伝によるスキルとの双方が発達してはじめて、他者を自己と同一の意図をもった存在であるという認知能力が発現するとトマセロは主張する。そしてこのプロセスこそ、人間の社会における文化的伝承が存在しなければ困難な人間の特性だというのである³⁵⁾。

そのため、この認知能力を発達させるプロセスが、生後間もない時期からの他者とのコミュニケーションによってなされなかったとしたら、そのヒトは将来的に人間としての行動を発現させるのは困難となる。だからこそ、「人間が一人だけで、他者から言語を使われたことが一度もない場合、社会的なパートナーや事前に存在する記号なしに、現代の言語を構成するのと同様な言語記号からなる『私的な言語』を自分で発明することはまったく不可能である」³⁶⁾とトマセロは主張するのである。しかも、モノの文化的伝承においても、人間はチンパンジーなどの類人猿とは違い、モノが使用される意図や、モノの有する時代的限界性を乗り越えそれを改良する人間の能力も、このヒト特有の認知能力プロセスが支えているとトマセロは述べている。

「人の文化伝統とチンパンジーの文化伝統～中略～を最も明確に分けるのは、ヒトの文化伝統が時間の中で改良を積み重ねていくという事実到他ならない。すなわち、ヒトの文化には『歴史』があるわけだ。ヒトが改良を蓄積させ、歴史を重ねていけるのは、それらを支える文化学習のプロセスがきわめて強力だからである。こうした文化学習のプロセスが力をもつのは、他者を自分と同じく意図をもった存在として理解するという、ヒトに特有の認知的適応によって支えられているからに他ならない。」³⁷⁾

以上の考察から、以下の諸点の重要性が浮かび上がってくる。

第1に、生物学的な遺伝的要素だけでは、ヒトは人間にまで成長できず、文化的・社会的空間のなかで成長してはじめて、人間としての認知能力を発現させるという点である。

第2に、第1の点と関連して、「社会性」「意識」「生産」という本稿の考察での鍵となる概念の重要性が、本節の人間化のプロセスの考察から指摘されうる点である。

そして第3に、トマセロが人間の歴史性に言及して

いるように、この認知能力発達のプロセスが時間的にも空間的にも「普遍性」を帯びているという点の重要性である。

それでは次に、これまで考察してきた諸点が正当性をもちうるかどうか、検証してみたい。

第5節 検証と総括

ここでは2つの歴史的事実をもとに、検証していきたい。

まず、ナチスによるユダヤ人の赤ちゃんを感情のない「最強の」兵士へ育てようとした人体実験である。このとき、赤ちゃんは、心地よい環境と万全の栄養状態を与えられていたにもかかわらず、看護師による人間的な接触を一切禁じられていたためか、すべての赤ちゃんが早いうちに死亡したという³⁸⁾。このことから、人間的なコミュニケーションは、認知能力の発達に欠かすことができないという視点を再確認できるだろう³⁹⁾。

次に、16～17歳になるまで地下牢に閉じ込められ、社会的交流を断たれて成長したカスパー・ハウザー(Kasper Hauser)の生涯をみてみたい。彼は、生後3～4年は養育者のもとで育ったと推測されている⁴⁰⁾が、その後、地下牢に閉じ込められ、彼自身が述懐しているように、寝ているあいだに食事と着替えが運び込まれ、ほとんど人と接触することがないまま、暗い地下牢のなかで成長することを余儀なくされた。推定16～17歳のころに、持たされたと思われる手紙とともに保護され、それから教会で保護された時期を経て、A・v・フォイエルバッハ(A・v・Feuerbach)のもとで人間としての生活を取り戻していく。

彼は、長い地下牢生活で骨格がゆがんでしまい、歩行が困難な状態だった。また、当初言語を発することができず、会話もできない状態であった。教会にいた間、彼を不憫に思った市民からの贈り物も彼には奇怪に映ったらしく、怖がって近づこうとしなかったという。「彼にはことばや概念がまったく欠けていて、ほとんどの日用品や出来事などについてまったく無知だった。日常の習慣や道具や生活必需品など全てに無関心で、むしろ嫌悪すら示していた」⁴¹⁾。これらの諸点からも、人間の認知能力の発達にとっていかに社会的・文化的な環境が重要であるかが理解できる。

また、彼にとっては、おいしい肉料理も苦痛であり、地下牢時代から味わっていたパンと水以外はなかなか口にしようとはしなかった。フォイエルバッハと散歩をしても、いい香りのする花畑をわざわざ遠回りして歩かなければならなかった。彼にとって花のにおいは

苦痛以外の何ものでもなかったのである。これらの点から、遺伝的要素の強いと思われる人間の五感もまた、いかに社会的な環境によってその形成が左右されるのかを理解することができる。

こういった身体的苦痛をともなう文化的な活動には最後までなじむことができなかったが、他者とのコミュニケーションや学習の意欲はすさまじい発達をみせ、彼は大学へ通うまでになった。しかし、宗教的意識は最後までもつことができなかったという⁴²⁾。

フォイエルバッハは、「本来、幼児期や少年期は、身体的成熟と同じく、精神的な発達と形成についても筋道が決められていて、〔これらは〕決して飛びこえたり、抜かしたりできないものだ」とし、「カスパーが成人期の初期になって、はじめてこの世の中に子どもとして出てきたということは、他の人々のように、次第に発達し形作られてきたものとは異なった様相を呈して当然となる」と鋭く洞察している⁴³⁾。

この検証の結果、本稿のまとめとして強調したいのは、前節で概括したように、自然的存在としての人間が生物学的な要素をいかに継承しようとも、それが社会的存在としての人間を取り巻く諸要素、すなわち、文化的・社会的な環境のもとでの「生産」「社会性」「意識」とそれらの「普遍性」といった要素が捨象されてしまうならば、私たちが自らの生命を維持し、あらゆる能力を発達させるのは困難だろうと思われる点である。

そのため、人間の特性や属性を説明するものとしての人間本性は、生物学的要素（遺伝的能力の身体的可能性）それ自体を意味するのではなく、それを基盤として含むという視点が強調されなければならないように思われる。そこで、人間を人間たらしめる一側面としての人間の身体、および、進化のプロセスにおいて生物学的に継承してきた要素は、人間本性の基体として、限定的な理解をする必要があるのではないだろうか。

一方で、人間本性はまた、文化や社会と同等でもない。文化や社会は、生物学的なヒトを人間たらしめる要素の2つ目の側面として、人間本性の基体というものである。

そうすると、私たちはいったい何を人間本性として認めればよいのだろうか。私は、これら2つの人間本性の基体の接点である、ヒトが人間へと成長するプロセスにおいて必須となる属性としての「生産」的活動、「社会的」活動とコミュニケーション、「意識」による社会的な意図の把握と伝達、そしてそれらが歴史的・空間的に「普遍性」を帯びた活動として存在する点を、

人間本性として位置づけたほうがよいのではないかと考える。また、これらに必要な要素として、「言語的コミュニケーション」もまた、つけ加えておきたいと思う。

これらの視点は、ある人間の性格を生まれついたものとして、その人の社会的な生の意味を捨象する風潮、すなわち、本稿での主張にそくしていうならば、厳密な意味での人間本性的な議論を抜きにし、その基体の視点からのみで人間を語ろうとする昨今の風潮にたいして、一石を投じることができるのではないかと考える。

【注】

- 1) ルソー著、本田喜代治・平岡昇訳『人間不平等起原論』岩波文庫、1972、pp71～76
- 2) ホッブス著、水田洋訳『リヴァイアサン（一）』岩波文庫、1954、p210
- 3) 筆者の尊敬する自然科学者は、このような極端な意見には慎重な立場をとっている。例えば生物学者の長野敬氏は、M・リドレー（Matt Ridley）がその著書『やわらかな遺伝子』のなかで示した人間の性格にかんする遺伝・環境・親という三要素のパーセンテージについて、「どれがどのような割合かを確定的にいうのはおかしい。そうではなくて、どれも重要な要因であることを前提としつつ、それらが諸個人の性格を形作るうえでどのような相関関係にあったのかを考えるべきであり、ひとつの尺度を与える議論は適切ではない」と述べている（直接伺った発言）。また、動物学者の小原秀雄氏は、「人間は遺伝子によって性格が決定するかという議論をするとき、注意しなければならないのは、人間が38億年という生命の歴史のなかでつむいできた遺伝的要素は、階層性をもっており、それが我々の人間となった現時点においてどのような意味をもつのかをきちんと洞察すべきだということである」（2008年9月28日・総合人間学会談話会「なぜ人を殺してはならないのか」における氏のフロア発言）と述べている。
- 4) G・マールクシュ著、高橋洋児・今村仁司・良知力訳『マルクス主義と人間学』河出書房新社、1976
- 5) 前掲書『リヴァイアサン（一）』、p207
- 6) 同上書、p208
- 7) 前掲書『人間不平等起原論』、p70
- 8) 同上書、p71
- 9) ホッブスのいう自然権(Right of Nature)とは、「各

人が、かれ自身の自然すなわちかれ自身の生命を維持するために、かれ自身の意志するとおりに、彼自身の力を使用することについて、各人がもっている自由であり、したがって、かれ自身の判断力と理性において、彼がそれに対する最適の手段と考えるであろうような、どんなことでもおこなう自由である」（前掲著『リヴァイアサン（一）』p216）。

- 10) 前掲書『リヴァイアサン（一）』、p217
- 11) ルソーは「自己愛は一つの自然的な感情であって、これがすべての動物をその自己保存に注意させ、また、人間においては理性によって導かれ憐れみによって変容されて、人間愛と美德とを生み出す」（前掲書『人間不平等起原論』p181）と述べている。
- 12) たとえばA・スミス（Adam Smith）は、人間には動物が共通してもつ「自己保存（self preservation）」と「種族増殖」とのふたつを目的としてもっており、それが人間の生命愛、死への恐怖などにつながるとしている（A・スミス著、米林富男訳『道徳情操論（上）』未来社、1969、p186。また、A・セン（Amartya Sen）は、人間にとっての本質的自由の重要性を説いているが、その基盤として、飢えていないか、健康な状態にあるかといった各人の基本的な「機能（functionings）」にまで目を向けている点において、興味深い論点を与えているように思われる（『福祉の経済学』岩波書店（1988）、『貧困と飢餓』岩波書店（2000）、『不平等の再検討』岩波書店（1999）、『自由と経済開発』日本経済新聞社（2000）などを参照いただきたい）。
- 13) 前掲書『人間不平等起原論』、p52
- 14) K・マルクス著、城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫、1964、p96
- 15) 同上書、pp96～97
- 16) 前掲書『マルクス主義と人間学』、p39
- 17) この際の他者を目的とするという視点を、マルクスは『ミル標註』において展開しているようにと思われるが、紙幅の関係上指摘するにとどめたい。
- 18) S・ミズン著、松浦俊輔・牧野美佐緒訳『心の先史時代』青土社、1998、p21
- 19) 同上書、p112
- 20) 同上書、p125
- 21) 同上書、pp180～184
- 22) R・ダンバー著、松浦俊輔・服部清美訳『ことばの起源 サルの毛づくろい、人のゴシップ』

- 青土社、1998
- 23) 同上書、p185
- 24) 山極寿一氏は、およそ5万年前から、人類の社会や文化が多様化する原因を言語の発達にもとめるミズンの見解にたいして、「これは私たちのような霊長類学や生態人類学をやっている者にとっては納得できる話だし、なかなか魅力的な説だと思います」と述べている（「対話 人類の起原と幼児期 山極寿一×新宮一成」『大航海 No.52 特集言語と人類の起源』新書館、2004、p35）
- 25) 前掲書『人間不平等起原論』、p62
- 26) 前掲書『心の先史時代』、p165
- 27) 前掲書『リヴァイアサン（一）』、p68
- 28) 前掲書『心の先史時代』、pp211～216
- 29) 前掲書『経済学・哲学草稿』、p97
- 30) 前掲書『心の先史時代』、p225
- 31) 以上の3つの引用は、『心の先史時代』212～213頁。
- 32) M・トマセロ著、大堀壽夫ほか訳『心とことばの起源を探る 文化と認知』勁草書房、2006、p16
- 33) 同上書、p17
- 34) 同上書、p79
- 35) 同上書、p104
- 36) 同上書、p176
- 37) 同上書、49～50ページ。トマセロはミズンと違い、漸次的進化の観点から仮説を立てているが、いずれにしろ、人間における社会性が重要である点に変わりはない。
- 38) 竹内章郎『哲学塾 新自由主義の嘘』岩波書店、2007、pp141～143
- 39) トマセロは、人間の赤ちゃんに特有の「超社会的」行動として、養育者と「原会話（protoconversation）」を交わす点、その際に大人の身体（特に口と頭の動き）を模倣する点をあげている。また、外部に存在するものへ注意や行動を向ける際に、それは「環境にたいする自分の行為の結果だけでなく、自分自身の行動の目標をも経験する」という（前掲書『心とことばの起源を探る』pp75～79）。
- 40) なぜならば、ナチスの実験からもわかるように、ある程度の年齢に達するまで保護がなかったとしたら、彼はおそらく生き延びることは不可能だったからである。
- 41) A・v・フォイエルバッハ著、中野善達・生和秀敏訳『野生児の記録3 カスパー・ハウザー地下牢の17年』福村出版、1977、p35
- 42) この点で、ミズンが主張した人間の芸術に関する三要素が、超自然的な宗教イデオロギーを創りだすことを可能にすると思われるが、人間の遺伝的要素が必然的にそのような観念を創りだすという議論には、カスパー・ハウザーが明確な反証を与えている。「彼の心の中に何とか宗教的意識を目覚めさせようとさまざまな試みがなされたが、どれも稔りはなかった。彼はダウマー教授に、牧師のいっていることの意味が分からない、何のことか理解することができない、と率直な不満を述べた。」（同上書、p108）
- 43) 同上書、p62